

# あとがき

## とある24歳が 環境白書に携わって

「福岳くん、環境白書をつくってみたいか」

師事する教授の、こんな一言がきっかけで私は本書に携わることになりました。右も左も分からぬまま本書作成のプロジェクトの一員とさせていただき、だんだんとできるが増えてきたかなあとというところで、気づけば「あとがき」を書くような時期になっていました。時の流れはいつでも早いものですね。

私が担当した中で特に印象深かったのは、取材したみなさんの「経歴年表」を作ることでした。インタビュー原稿を何度も読み返しながら、この人はこの時どんな気持ちだったのかな、何を考えていたのかな、などということに思いを巡らせておりました。時間とともに大きく変わる環境の中で、12名それぞれがとってきた

アクション。その中から今も昔も変わらない、大切なものがあることを12名のみなさんから教わった気がします。ひとつは、大きな転機における行動力。もうひとつは、常に新しいことを学ぼうとする謙虚な姿勢です。

行動力。入社を志望している企業の最終選考を放り出して、サークルの後輩と山登りに出かける。今しかないという理由で億単位の投資をする……。ちょっと私には真似できそうにありません(笑)。これはちょっと極端な例ですが、みなさん一度はご自分の人生を再考する転機に出会い、何らかの決断をなさっています。そして一度決めたことからは一切のブレがなく、ブルドーザーのようにゴリゴリとご自分の理念に従い突き進んでいます。カッコいいです。

謙虚な姿勢。「教えてもらった、育ててもらった」。取材を通してみなさんからよくお聞きした言葉です。鈴木氏がおっしゃっていた、「人は聞く動物なんです」はそれを端的に表していると思います。加えて、みなさん本当に朗らかなお人柄で、たくさんの協力者に囲まれていらっしゃいます。人から何かを学ぶこと、協力してもらうことがいかに大切なことかを感じさせられました。やっぱり、カッコいいです。

思い切った決断をしたのち、真っ直ぐに行動ができる。その行動を支える知恵を学び取り、他者から慕われる謙虚な姿勢を常に保つ。言葉にしまえば簡単

で、何も特別なことではないのですが、これは本当に難しい。取材した方々のように社会の何かを変える、とまではいなくても、一人の人間としてこうありたいと私は思います。

私は2013年春から社会人としての生活をスタートさせます。20代の我々が生きてきたこの時は、とても変化の激しい時代です。本書に特記した箇所はありませんが、ITにおける進化などはその代表でしょう。携帯電話を誰もが持ち、20年前のスーパーコンピュータと同等以上の処理速度を持つパーソナルコンピュータを買うことができる時代です。こうした情報媒体の進歩と同時に、私たちが得られる情報は加速度的に増え続け、社会ではあらゆる選択肢が無限に広がります。そんな中へ、どんなことができ、どんなことができないのかも分からないようなヒヨッコが飛び込むわけです。もちろん不安はありますし、何が正しいのか分からなくなることもあるかもしれません。そんなときは、本書を手にとって「行動力」と「謙虚な姿勢」の大切さを再確認しつつ、希望ある未来に向かって歩みを進めてまいります。ゆとり世代、なんて揶揄もされる私たちにだって「世界は、きっと、変えられる」。

序文にあった通り、この環境白書は民間団体が作成しました。公益財団法人秋山記念生命科学振興財団のネットワーク形成事業助成を受けて実施する「Rio+20北海道ネットワークプロジェクト」の一環として位置づけられており、各分野の専門家とともに、あらためて北海道の環境を発信していくことや、行政だけではな

く、市民・民間が協働で白書を発行するという活動の可能性を、たくさんの方に知っていただくことを願うものです。そこから、次の20年を担う若い人たちと一緒に活動していただける産学民官にネットワークを広げ、私たちが環境や社会の変化のモニタリングやメッセージ発信の担い手になれることをたくさんの方に知っていただき、参加の環を広げたい。そんな制作者の「思い」が込められています。読者のみなさま、従来の環境白書と比べて本書はいかがだったでしょうか。読みやすかった、なんて感想を持っていただけたら嬉しい限りです。

今回の活動にあたり、私は多くの方々にご協力いただきました。編集委員のみなさん。就職活動が忙しかった時期はこちらの活動はそっちのけ、資料の提出は遅れ放題、数回の会議遅刻および欠席……。私はお世辞にも優秀と言える学生ではありませんでした(苦笑)。そんな私にみなさんは多くのことを教えてくださり、本書の大事な締めを任せてくださいました。みなさんとともに得た、大学での机上学習ではけっして得られない本当に貴重な体験を、これから社会に活かしていくことで恩返しができたらと思います。

末筆ながら、多忙な日程を割いて取材におつきあいいただいた12人のみなさんに、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

また、編集を引き受けてくださった平田剛士さん、装丁の楳斐明広さん、その他、制作に関わってくださったたくさんの方々に、心より感謝し、あとがきを締めくくりたいと思います。ありがとうございました。

**福岳 涉**

北海道大学大学院環境科学院  
環境起学専攻修士2年